

【発表②】 荒牧亜衣（仙台大学）

聖火リレーの記録と記憶：1964年東京大会関連資料を対象に

IOC がレガシーということばに計画的かつ肯定的な意味合いを戦略的に付与したことにより、この概念は、オリンピック競技大会を招致する都市が開催意義を示す際の必須要件となった。また、石坂（2018）も指摘するように、IOCによって価値づけられたレガシーは、過去のオリンピック競技大会をも再考する概念として拡張を続けている。この拡張は、オリンピック競技大会が「もたらしてきたもの」や「もたらすであろうもの」を曖昧にはしていないだろうか。本発表では、以上の問題意識から、1964年東京大会の聖火リレーを対象に、その記録から大会がもたらすものについて明らかにする。

【発表③】 釜崎 太（明治大学）

スポーツにおける社交の可能性—ジンメル『社交の社会学』精読—

世紀転換期のドイツを生き「生の哲学」者ゲオルグ・ジンメルは、ふたつの意味で革新者であった。ひとつには、「科学として認められない」（『社会学の根本問題』）社会学の必要性を訴え、ウェーバーやテニースらとともに、ドイツではじめてとなる社会学者会議を開催し、「社交の社会学」という基調講演をおこなっている。ふたつめに、愛国主義が蔓延する第二帝政期のドイツにおいて、敵国文化と批判されていたイギリス生まれのスポーツを、ジンメルは日常的に実践し愛好していた。当時はまだ蔑まれていた自転車に乗って半ズボンで大学に出校し（Landmann, E）、自宅にテニス場を作って社交を楽しんでいたのである（Simmel, H）。本報告では、ジンメルの革新者としての主張を読み取ることができる講演録『社交の社会学』（1910年）の精読を通じて、そのスポーツ批評としての可能性を論じたい。

【発表④】 佐藤 洋（明星大学）

「2018 IAPS in Oslo, Norway」参加報告

発表者は、今年9月にノルウェー・オスロで開催された国際スポーツ哲学会（IAPS）に参加し、はじめて英語による口頭発表を経験した。タイトルは博士論文の一節で論じた議論を使い、「Understanding the State of Virtue of Athletes: What is Kazuyoshi MIURA's virtue?」とした。今回の発表では、口頭発表までの準備や発表後にいただいたアドバイス、またノルウェーまでの道のりやオスロ体験などを紹介し、学会大会参加の報告としたい。